

第7編

図書室と学習室



図書室について



看護専門学校図書担当(司書) 吉野由美子

東京医科大学看護専門学校図書室の 50 年間を各面から振り返ってみた。

まず施設と設備面であるが、昭和 39 年、西新宿の東京医科大学病院構内に東京医科大学附属高等看護学校が開校し、図書の充実を図るべく収書作業が行われた。昭和 53 年には東京医科大学看護専門学校と改称され、西新宿から現在の大学キャンパスの基礎新館へ看護専門学校は移転し、図書室はその 2 階に部屋を設けた。

昭和 62 年、教員用と学生用の図書を共有し蔵書数を増やし閲覧室を拡充する事になり、図書室を 37.80 m²から 75.60 m²に広げた。また、平成 4 年にはさらなる蔵書の増加に伴い図書室は 2 階から現在の場所 1 階南側に移された。書架・閲覧室・書庫・コピー室・4 つの学習室で、面積は約 161 m²である。閲覧席は 60 席。平成 9 年にはパソコンが 8 台設置され、看護研究のための文献検索の他、文書作成に利用された。平成 23 年にはパソコンは 12 台となった。学習室が設けられたのは、第 5 代校長である岩根久夫先生の発案で、閲覧室として使うだけでなく、実習グループで学習するために設けられた。また、第 3、4 学習室にはビデオリーダーが設置され、学習のための映像を観る事ができる。1 階に図書室を移転してから、入口に盗難防止のためのブックディテクションを設けた。



図書閲覧室とパソコン



第一学習室



第三学習室

第五代学校長岩根先生の発案でできた学生のための学習室

昭和 63 年には 22 回生から図書室用ロッカーを記念品として 1 階に備えて頂き、平成 17 年には 39 回生より図書室内にナイチンゲールのレリーフを頂いている。

現在の場所は、南側に大きく窓をとってあり昼間は明るい。また、図書室入口はガラス扉のため、中の様子を、また中からは廊下の様子が見て取れ開放的である。



次に図書館のシステムについて言えば、平成 7 年になると蔵書も約 1 万 2 千冊余り、雑誌も 71 タイトルを購入するまでになった。この頃は、蔵書はカードで整理されていた。平成になると、図書館界は、コンピューターやインターネットに接続し図書館管理システムを取入れてデータの一元管理をすることが必須になってきており、図書室でも図書館システムを導入することを長年模索してきた。平成 5 年から受入図書をデータ化する作業をしてきた。平成 19 年に図書蔵書管理システム「ピタゴラス」を導入し、蔵書の登録管理と蔵書検索ができるようになった。

平成 20 年、大学図書館の協力によって、大学図書館分館の下部組織として NACSIS (国立情報学研究所) へ加盟することができ、また大学図書館の図書館システム「CARIS」へ看護専門学校図書室として参加することができるようになった。これに伴い、個々の図書に対して、バーコードラベル貼り・NACSIS への登録・「CARIS」へのデータ移行と作業は膨大であったが、それまでのデータ蓄積と、大学図書館の職員の方々、看護専門学校の 3 年生と事務職員など多数の協力によって整備された。

平成 23 年 1 月に大学図書館の図書館システムが「CARIN」に変わり、その稼働を機に図書室も、大学図書館と同じように運営することができるようになった。

平成 23 年から、雑誌の所蔵情報も「CARIN」にデータ蓄積するようになり、OPAC (図書館蔵書検索) で所蔵を誰でも確認することができるようになった。これ以外にも、大学図書館の協力のおかげで多くの恩恵を受けられるようになった。NACSIS への加入により、標準化された全国共通の図書データを取込む事ができるようになったので、目録作成のスピードが格段に早くなりまた正確になった事。学生証に学籍番号のバーコードを入れて、図書の貸出返却がバーコード読取りになり、貸出カードなどへの記入がなくなった事。蔵書点検が簡易になった事。また、看護専門学校の所蔵目録の公開により、大学病院に勤務されている看護師の方々への情報提供・サービスにも貢献できるようになった事。メリットは数え切れないほどある。



雑誌



開架式書庫

次に蔵書構成と図書の分類について述べたい。昭和 39 年、開校にあたって図書の整備は、当時の教務主任加藤三千子先生が、『草創のころ』（「開校二十周年記念誌」）の中で図書資料を選書されたご苦勞を記されている。前身の東京医科大学病院附属准看護婦学校の図書も引き継がれていることだろうが、教務用として約 900 冊、学生用として約 500 冊であった。この頃の図書で現存しているものは、『日本文學全集 22 芥川龍之介集、新潮社、1959』『看護哲学、芝田不二男著、メヂカルフレンド社、1972』などがまだ図書室に所蔵されている。また、昭和 61 年に廃止された進学課の蔵書 1,137 冊を図書室で引継いだ。

昭和 53 年基礎新館に移ってからは、それまであった図書委員会をさらに整備し、徐々に図書室として形づけられた。この当時の図書の分類は、看護の図書については日本看護協会看護学図書分類表を、また一般の図書は NDC（日本十進分類法）を使っていた。平成 5 年からは医学・看護専門図書の分類は、大学図書館に倣い NLMC（米国医学図書館分類法）で分類した。

利用者との関わりとしては、平成 7 年頃までは、学生が図書委員となり放課後に貸出返却また図書の整備などをしていた。また現在まで、学期末には学生が図書室の掃除に来て、床の掃除だけでなく書架整理や、製本準備作業の手伝いをしてくれることもある。

毎年 4 月の初めに 1 年生を対象に、図書室の使い方のオリエンテーションを行っている。1 年生は基礎科目として『情報学』の授業が設けられ、コンピューターの使い方及びインターネットを使った情報収集の方法、データベースへのアクセス方法などを学んでいる。文献検索は、実際は 2・3 年生の実習が始まると使用頻度が高くなり、レファレンスや Web 操作の相談が多くなる。また、16 時過ぎに実習先から戻ってきて図書室を利用し学習する学生が多く見られる。同窓生の利用も多い。大学病院勤務の看護師の方が、夜勤明けなどで図書室に訪れて利用されている。また特に、平成 23 年に「CARIN」で所蔵公開してからは、文献複写依頼が多くなり、学生だけでなく医師・看護師の方も利用し易くなった。

図書室の 50 年間を、残された記録や統計から振り返ってきたわけだが、私が看護専門学校に勤務したのは平成 20 年の 7 月からであるから、わずか 5 年間である。私以前の長い期間を支えてきた方々は、初代教務主任の加藤三千代先生、そして四半世紀在籍された図書担当(司書)の塩田純子さんはじめ、多くの歴代の教職員そして看護学校の卒業生を含めた学生達である。ここにある資料は、当時の最新の医学と看護学として収集したものであり、学校にとっての財産であると同時に、それを使って勉学や研究に励んできた看護学生と先生方の『東京医科大学看護専門学校』で学んだという証となるものである。とりわけ古い図書には、貸出の記録カードが見返しに残っていたりして、借りた方の学籍番号や名が記されていて、長い歴史を感じる。時代の変わりと共に図書室としてのあり方も変わるかもしれないが、東京医科大学看護専門学校を支えてきた人々のために、これからも役立つ図書室としてあるべきと考える。最後に、私が図書室を運営する上で、ご尽力くださった大学図書館の山本多賀子さんはじめスタッフの皆様、情報学講師の和田佳代子先生に感謝申し上げたい。